

第十三部会

痛みの宗教的意味

村上喜良

生きているうちに人間は様々な「痛み」を感受する。怪我や病気等による肉体的痛み、名誉棄損や背信行為等による精神的痛み、悪口や冷淡或は無関心等による心の痛みである。これらの痛みは大抵の場合、相互に深く影響し合う。肉体的痛みが精神的或は心の痛みに変容したり、その逆もある。一方、他の痛みとは比較的独立した深い痛みがある。それは肉体・精神・心の次元の深奥にある霊的痛み、或は超越的な痛みである。霊的痛みも様々であるが、発表では正義をめぐる霊的痛みについて少しく考察を試みてみたい。

正義とは善と悪との適正な対応関係である。善因善果と悪因悪果、即ち善悪の因果応報が正しく実現されていることが正義である。これは仏教を信奉するしに拘わらず、人類の普遍的な正義感であり、人間の道徳性の根幹であると思われる。この適正な対応関係の破綻が不正義である。しかし、仏教哲理からすれば、原理上善悪の因果応報は完全であり、悪果には必ず悪因が存在する。従って、悪果から逃れる途は、善因を自ら積むか、或は仏様に帰依して善因を積まさせて頂くかであり、何時か必ず善果に至ることとなる。それらが現世に於いて実現さ

れなくとも、来世に於いて、或は地獄と極楽という次元で善悪の適正な関係性が完遂されるのである。

キリスト教に於いても同様である。善なる神は必ずや義なる者に栄光を、不義なる者に罰を与える。それが現世に於いて実現されなくとも、最後の審判に於いて完全に善悪の適正な関係性は完遂されるのである。因みに、カントは、現世に於いては必ずしも義なる者が幸福であり、不義なる者が不幸であることがなく、正義が実現されていない。正義が実現される為には、神の存在と個人霊の不死とが要請されると主張する。ここに、善悪の適正な関係性としての正義は人類の普遍的な道徳的信念であることが伺われる。

以上で述べられた正義に於ける正義が実現されていないという不正義に対する痛みは、必ず何時か癒される。善悪の不適切な対応関係は必ず何時か何処かで是正される。それ故、不正義の痛みは一過的であり、それ自体に意味があるわけではなく、むしろ乗り越えられるべき一時的な障害に過ぎない。また、この痛みの癒しには死後の世界や仏や神が関わるが、霊的即ち超越的或は宗教的な痛みではなく、未だに精神的或は心的な痛みに過ぎない。畢竟、人間的な痛みに過ぎないのである。

ヨブの痛みは霊的な超越的な痛みである。ヨブは神も認める義人でありながら、神はヨブをサタンの手に委ね、サタンは多くの過酷な災いをヨブに与える。ヨブは自らの義を主張し、神の不正義を正そうとする。しかし神はそんなヨブの訴えに耳をかさない。善悪の適正な対応関係としての正義を基準にすれば、ヨブに対する神の行為は不正義と看取される。しかし、神

を前にして誰が正しいものでありえるか、神の偉大さからすれば、ヨブは高慢の罪を犯しているのである。それ故、神のヨブに対する行為は決して不正義ではなく、正しい罰である。しかし、この解釈は正義を未だに人間的な次元で考えているに過ぎない。注意深く見るなら、神の計り知れない偉大さが提示されると同時に、神は善悪の適正な対応関係という正義を遥かに超えてしまっているのである。従って、仮にヨブが本当に義人であったとしても、善悪の彼方にある神に向かって義を訴えても無意味である。

では、ヨブの痛みは如何に癒されるのか。それは、痛みを人間の善悪の次元で捉えるのではなく、善悪を超えた神の全き偉大さのうちに見ることにより、痛みを罰ではなく試練として受容することである。この受容によって痛み自身に意味があり、その先に希望が輝き見えるのではないだろうか。イエスの受難が無意味ではないように。

「障害」のキリスト教的意味

寺戸 淳子

本発表では、一九六〇年代以降のカトリック世界における「知的障害者（と健常者との関係）」をめぐる言説を分析しながら、それらが同時代の社会に対してどのような批判を投げかけ、異なる価値を提示しようとしているのかを考察する。そのために以下の組織・著述家を取り上げる。①一九五〇年代以降

の歴代教皇の発言、特にパウロ六世とヨハネ・パウロ二世の言説、②一九六〇年代からカトリック教会世界で知的障害児をとりまく状況改善の努力を重ねてきた、〈障害がある人々のためのキリスト教事務局〉創設者マリー・エレヌ・マチュー、〈ラルシュ共同体〉創設者ジャン・ヴァニエ、および彼らの活動に影響を与え、あるいはその活動から影響を与えられた聖職者たち、そして比較のために③非欧米世界における障害者の社会的位置づけと彼らを取り巻く価値の世界の人類学的研究、今後の展開の手がかりとして④ジャン・ヴァニエとジュリア・クリステヴァの往復書簡。

教皇メッセージのテーマは、時代と共に変化してきた。二十世紀半ばには、個々人の苦しみがキリストの十字架上の贖いの苦しみに類比され、苦しみを捧げるという意義が述べられていたが、六〇年代には苦しむ人々の社会統合の理想がそれにとって代わり、ヨハネ・パウロ二世のメッセージでは、苦しむ者もつ「他者や社会に呼びかける力」が説かれるようになる。ここでは「苦しみ」が救いへの道を開くという理念が示され、またその語り方には、苦しむことと苦しみに寄り添う行為に言及するとき、個別の事例を出さず、キリストとマリアに代表されるという特徴がある。

これに対し、マチューとヴァニエの言説には、体験談が豊富で固有名詞が頻出するということの他に、以下の特徴がある。まず、「苦しみの聖化」を否定し、苦しみの軽減に向かう行為こそ必要だと説かれるが、その行為が「与える」のではなく「受け取る」ことである点に、「利他性」を核心と捉える議論と